

集落とネットワークから地域づくりの可能性を考える

山形県北部に位置する最上地方と庄内地方。両地方は隣り合っているもののその風土文化は大変異なっている。最上地方は懐の深い数多くの山間地を有しており、国内でも有数の豪雪地帯だ。そのことも起因して山菜やキノコなどの豊かな里山資源に恵まれている。庄内地方は広大な庄内平野の農業は国内屈指のコメどころを形成し、豊かな日本海の海産物にも恵まれている。距離的には両地方の中核都市間は車で1時間も離れていないのだが言葉（方言）も異なるというのだから驚きである。

農山漁村のふるさと学習を元に保全活動や地域づくりに取り組む NPO 法人里の自然文化共育研究所（以下「里の研究所」）の本部は両地方を繋ぐ最上川流域のちょうど真ん中、庄内町清川に位置している。清川はかつて内陸と海岸部を繋ぐ舟運の重要な川港町であったことは、地政学的な意味でも里の研究所の重要な拠点になりうることを裏付けている。

里の研究所ではこの3年間で最上・庄内両地方の20近い集落に入り、地域学習を基礎にした地域づくり事業を展開してきた。その活動はまだ途上であり、その成果がいかなる意味を持ちうるのかは未知数だ。だが、複数の地域集落に寄り添いながら活動を展開することで見えてきたこともある。

それは、農山漁村の個々の集落の力は大変弱まっているには違いないが（いわゆる「限界集落」）、集落にはそれぞれ地域特有の特徴や面白さがあり、それをネットワークすることで大きな力になりうるということである。例えば、最上の山間地域と庄内の離島では里山の炭と海産物を物々交換し商品化を進めている。また都会の大規模校の体験学習を複数の地域集落の多彩なプログラムによる運営体制を作り上げることで受け入れ可能にしてきた。

こうした事業展開が可能なのは、農山漁村に位置する地域集落には特徴があり、それぞれ異なっているからだ。地域に根差して調べ、学べば学ぶほど同一の集落などないことに気がつくはずだ。だから農山漁村の事業が集落間で競合してうまくいかないということは、原理的には起こり得ない、それどころか相互に補完しあうことが可能なのだと筆者は考えている。

大切なことは、第一に地域集落の活動者は本当に自分たちの地域づくりを成就させようと願うならば、自分たちの地域をしっかりと学び地域に根差した活動を展開するということである。第二に、このことがこれからもっとも大事になるのだが、地域外にアンテナを張りながら、他の地域集落とのネットワークや連携活動を本気で考え始めていくことではないだろうか。

東北の各地域活動を見て回るにつけて、地域間連携やネットワークが新たな地域づくりの地平を開くものだと感じる。しかし問題はこの機能はそれぞれが閉鎖している従来の地域集落間では独自には持ち得なかったということである。しかしもう少し長いスパンで眺めてみると昔から東北の地域集落は、暮らしを形成するためにネットワークを行っていた

形跡がみられる。先にあげた最上と庄内は農業カレンダーが 1 月近くも異なることから、労働力が特に必要な田植えや稲刈りなどにおいて集落単位で人員派遣を行っていたという古老の話もある。

価値ある地域集落を時代に伝え生かすために、今こそ地域集落間の交流とネットワーク、連携協働といったことが重要になるであろう。時にこれは行政区域を越えた調整が必要となるものであり、地域住民の意識がどこまで開かれたものとなるかにかかっている。そういう意味でこれからの集落コーディネーターや地域リーダーは当該地域だけではなく、よそまで視野に入れた役割と覚悟が求められていくのではないかと思う。

ムラ人が自分のところだけではなく、よそのムラの行く末についても思いやり行動できる姿勢を持つことができたとき、本当の意味で自分たちを生かしていくことにつながるのではないだろうか。